



有機的に繋がる町のコア

エリアリノベーションでサステイナブルな江津本町を目指して

江津本町は江戸時代、大森嶺山に次ぐ北前船の寄港地であり、天領米の積出港としても賑わっていた。日本三大瓦の一つである石州瓦の産地としても知られ、来待色とも呼ばれる赤瓦がこの町のアイデンティティである。しかし、現在では当時の繁栄ぶりを感ずることは難しい。さらに、建築物の老朽化、新築物件の洋風化、看板などの無機質な構造物が目立ち、古民家などの価値ある建築物は利用されないまま放置されるか、解かれる状況である。

町の活性化には定住人口や観光などで訪れる交流人口を増やすことが必要だと考えるが、今の人口減少時代、簡単に移住してくれる人はなかなかいない。

私たちは、住んでなくても観光に行くわけでもないけど、何かこの町に感じるものがある。なんとなく本町が好きで、本町の役に立ちたいという思いがある。そういった人が集まれば活性化できるのではないかと考えた。この関係人口を増やすプロジェクトを提案することとし、その試みをはじめ。

島根県立江津工業高等学校



地域の活性化に建築が用いられるとすれば、空き地を種も利用できる「アーバンガーデン」や田舎のホスピタリティを価値に変える「アグリツーリズム」、住みながら直す「ハウスプロジェクト」などの手法が考えられる。

また、活性化のために交流人口を増やそうと考えたとき、滞在時間を増やす必要があるが江津市は宿泊施設が少なく困難である。そこで民泊新法が施行されたことから今回は、町全体をホテルにする「アルベルゴ・ディフーズ」(注)を本町に落とし込んだアプローチをとることとし、その中核的なハブとなるであろう既存建築物のリノベーション・コンバージョンを提案する。

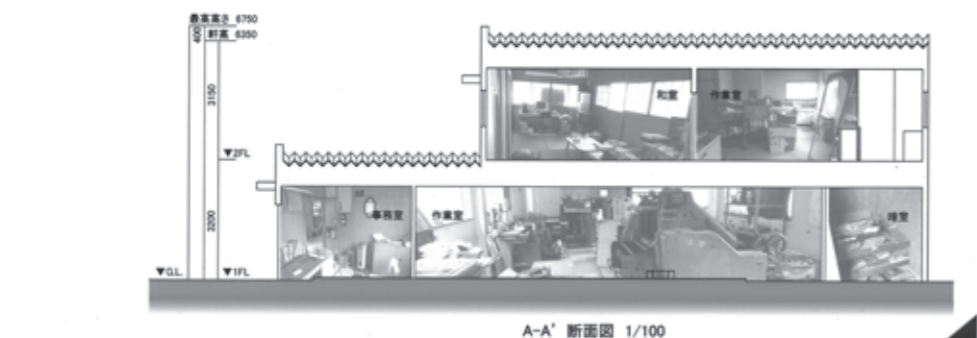
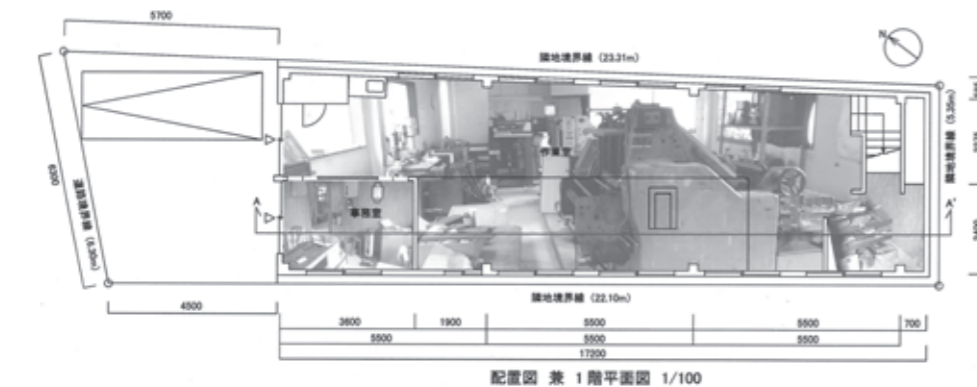
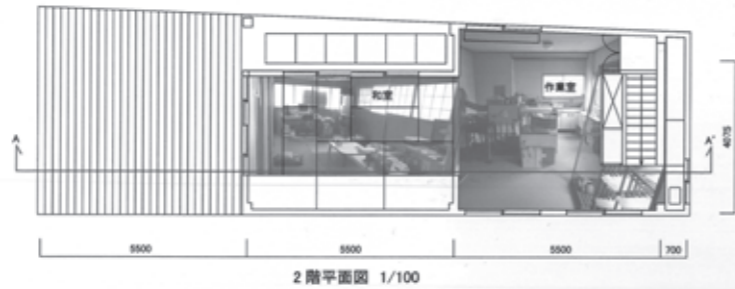
まず、雰囲気を感じるために町中を歩きまわり、住民などに話を聞き、ハブとして理想的な既存建築物を探した。町の中には多くの可能性を持った建築物があり、その選定や利用方法を考えながら理想的な空き物件を発見した。その後、敷地や平面を図面化し、設計を行った。

(注) アルベルゴ・ディフーズ イタリア語で「アルベルゴ」はホテル、「ディフーズ」は分数を意味し、直訳すると「分散したホテル」となる。地域に散らばっている空き家を活用し、建物単体ではなく地域一帯をホテルとするもの。



建築概要 (設計前後共通)

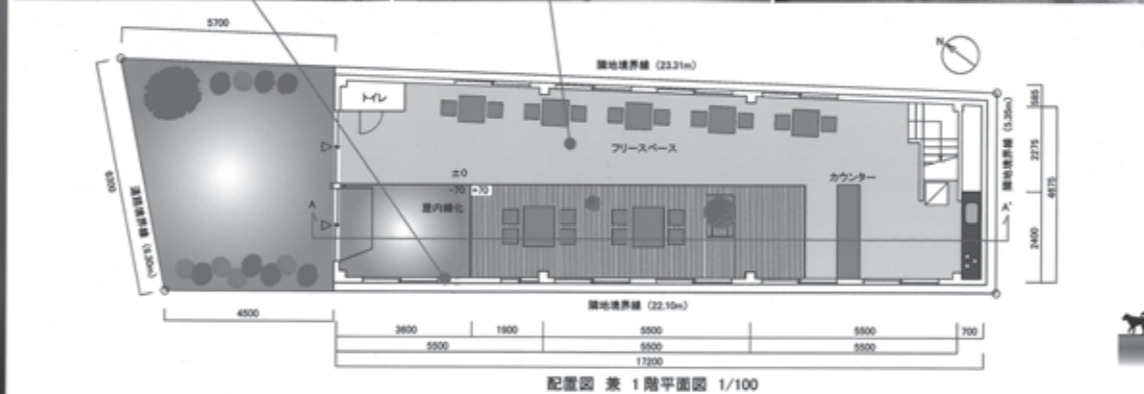
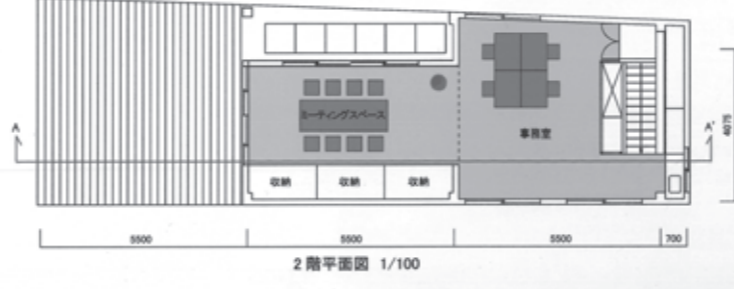
構造: 鋼構造2階建
敷地面積: 130.5 m²
建築面積: 87.5 m²
延床面積: 130.8 m²
1階床面積: 87.5 m²
2階床面積: 43.3 m²
建築率: 67.1 %
容積率: 100.2 %



A-A' 断面図 1/100

After

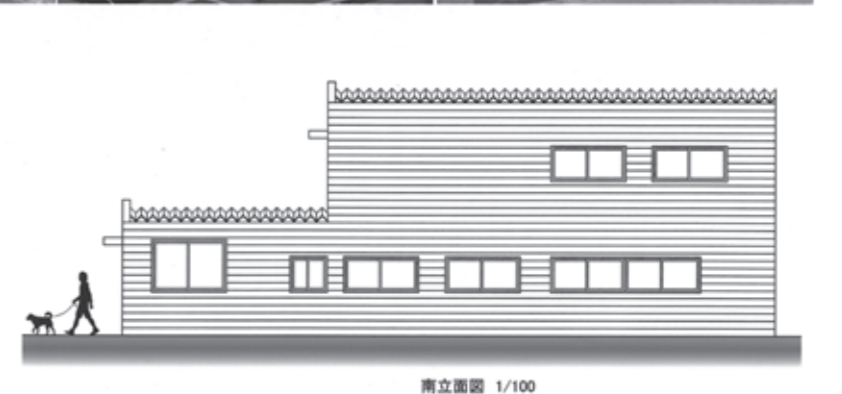
◆建築物通称「ときわ」
元々は町の印刷所で、封筒や名刺など印刷を行っていた民間企業の建屋。現在は使用者がいない状態で空き物件となっている。
許可を得て、内装の変更を実施中。関係人口を増やすため、近隣の学生を中心に、学校の授業や「地域系部活動」として計画・施工している。
DIY ボランティア活動もっており、少しずつ「本町」の「ファン＝関係人口」を増やしている。



配置図 兼 1階平面図 1/100



A-A' 断面図 1/100



南立面図 1/100